
The Romans At The Opera

歌姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Romans At The Opera

【Nコード】

N4520F

【作者名】

歌姫

【あらすじ】

『オペラ座の怪人』。その悲しすぎる運命。「人間見た目が結局9割」的な考えがどうも納得できなくて。。。。かなりファンタムに肩入れしていますが、どうぞお楽しみください

プロローグ

孤独な私

生れ落ちた瞬間から誰にも愛されることなく

ただ憎まれ続けた自分。

いつからだろう。

心にまで仮面をつけ始めたのは。

愛されなかった。

ただそれだけだったのだ………

いつまでも泣きじゃくる私をそっと抱きしめてくれたのは親友のメグ。

なんであなたまで泣いてるの。

クリスティーヌが悲しいときは私も悲しいの。

優しいメグ。それを暖かく見守る優しいマダム・ジリー。

泣いたらみんなが困るって知ってるけど、やっぱり涙は止まらない。

いつまでそうしていたんだろう。

みんなが気を使って一人にしてくれた。

蝋燭に火を燈し、お父さんに話しかける。

お父さん、どうしてクリスティーヌのところからいなくなっちゃったの。

お父さん、クリスティーヌはまだ知りたいことたくさんあるよ。

ねえ、ねえ、お父さん……………

ふと、思い出した。

死ぬ直前にお父さんが約束してくれたんだっけ。

「私が死んだら、神様に頼んで、音楽の天使をクリスティーヌに送ってあげよう。」

私の代わりに、その方に頼りなさい。」

「音楽の天使」。

その響きは耳に心地よく、幸せを運んでくれそうな気がした。

私は祈った。

早く音楽の天使に会いたい、と。

そうしているうちに私は眠ってしまったようだった。

いつの間にかぼんやりと霧の中に私は一人立っていて、どこからか優しい声がした。

「一人ぼっちの孤独な少女よ。

私は音楽の天使だ。君のお父さんに使わされてやってきた、音楽の天使だよ。」

甘く、柔らかい低い声。ああ、これは夢なんだ。お父さんが送ってくれた夢なんだ。

「君の声は素晴らしい。だが、まだ飛び方を知らない雛鳥のようだ。私が教えてあげるよ、飛び方を。君に私の音楽を教えてあげよう。」

「私に音楽を教えてくれる？」

「そうさ、君はやがてヨーロッパのプリマドンナになれるよ。

私が歌を教えてあげよう。その綺麗な声がいつそう輝きを放つように。」

その声は硬く縮こまっていた私の心を和らげ、甘く誘った。

ああ、どうしてNOと言えるわけがあるう。

他にすぎるものなんてないのに。

それが悲劇への第一歩だと知らなかったのに。

1

カーン、カーン……

オペラ座の寮の一日は近くにある教会の鐘の音から始まる。

私、クリスティーヌ・ダーエもその大きな音でいやおうなしに目を覚ます。

ああ、眠い。あくびが次から次へと出る。

隣で寝ていたメグ・ジリーも目を覚まし、大あくびをしながら起き上がった。

「おはよう、メグ。」

「おはよう、クリスティーヌ。」

私たち二人はそうやって朝の挨拶をするとふふつと笑って朝食に遅れないように支度をする。

質素な服を着て髪をとかしつけければそれで終わり。連れ立って食堂に行くのが幼いころからの日課だ。

「何かクリスティーヌ眠そうだね。あくびばかり。」

「ああ、昨日の夜眠れなかったの。」

先生のせいで、という言葉をかろつじて飲み込んだ。

このことは秘密。

メグにも言えないことなんだから。

食堂からはパンの焼ける香ばしい香りと、食器をならべるせわしい音が漂ってきて、成長期の少女のお腹をくすぐる。

メグと一緒に席に着き、簡単に食膳の祈りをささげてから食事を始める。

オムレツ、スープ、ベーコン、そしてロールパン二個。
決して豪華じゃないけど、すごく美味しい。

「とうとう今日はハンニバルの公演だね」

「あゝそうだねえ……。うわ、間違えそう。。。」

「間違えたりなんかしたら、こわいマダム・ジリーに叱られちゃうよ！」

ウインクをして茶目つ気たつぷりにいうメグ。

マダム・ジリーは彼女のお母さんであり、私のお母さん代わりであり、そして我等のバレエの先生だ。

「マダム・ジリーったら厳しいんだもん。この間なんてちょっと欠伸しただけで怒られちゃった。」

「じゃあ今日はクリスティー又は全力で欠伸をかみ殺さなきゃね。」

「本当よ。それにカルロッタさんにもにらまれたくないし。」

「ああ。あの声をまた聴かなきゃいけないのね。本当にやんなっちゃうわ。」

誰か代わりの人はいないのかしら。」

「代理を立てたりなんかしたらカルロッタさんが怒ってオペラ座をつぶしちゃうわよ。」

食堂は笑いで満ち、私の心は幸せでいっぱい。

ここの生活が好きだから。

お金も名誉もいらない。

このままがいい。

そんな小さな願いぐらい神様だって聞いてくださるはず。

・・・それにしても先生、なんでわざわざあの曲を私に練習させてるのかしら。

運命の齒車は回り始めたばかり。

#2

オペラ座の新作、『ハンニバル』で私たちは奴隷の少女の役をやる。バレエとコーラスでオペラに迫力をつける役割なのだが、個人として目立たないように、

かつ集団として映えるように演技するのはなかなか難しい。

しかし、鎖をがちゃがちゃさせながらくると回ったり、メグと息を合わせて踊るのはすごく楽しいものだった。

「ルイーザ！！今のところ遅れないで！！ナンシー！動きが汚い！！クリスティーヌ！もっと集中しなさい！！メグ！いちいち反応するんじゃないの！！」

ひえっ。マダム・ジリーはプライベートだと優しいけど、練習のときはめちゃくちゃ厳しい。

おっとここは二人でターンして……

そろそろカルロッタさんのソロが入るんじゃないかなあ

「このトロフィー！輝かしきヒーロー！もはや影もなきローマ！私たちの救い主 私たちの命の恩人！私たちをローマの圧制から救ってくれた！」

さあ、私たちのコーラス。深く息を吸って息を歌に変えていく。

「いざ歌え踊れよ かの人たたえいざ誉れたたえよ 彼らが強者
歌い踊りもてなそう・・・ 私たちに救いをもたらした 勝利の軍団
を迎えよう！」

地響きのようなコーラスとキーキーした・・・おっと失礼、カルロツタさんの声。

なんだかひどくミスマッチ。

変なの。

そう思ってるのは私だけじゃないみたい。

メグも、マダム・ジリーも・・・先生も。

もちろん私みたいな孤児がそんなこと思ったって何にもならないんだけど。

踊り

歌い

その繰り返しの中でオペラがいよいよ熱を帯て来たときだった。ふいに4人の男性が楽屋の方から入ってきた。

「みなさん、重要なお知らせがあります!!」

そのうちな一人 オペラ座の支配人であるルフェーベルさんは、声を張り上げてそう言った。

楽団長は音楽を止められたことで、かなりむっとした顔をした。

「今見ての通り、リハーサル中何ですがね。」

「ああ、すまない、すまない。しかし、とても重大な、今しか話せないことなん

だよ。みなさん、集まって下さい。」

今しか話せない重大な話？

私とメグは顔を見合わせて中央に向かった。

「短刀直入に申し上げます。」

私は今日この瞬間をもってオペラ座の支配人を辞めさせていただきます。」

うつ、うつそー？！

「私の後はこのフィルマンさんとアンドレくんがやってくれます。

2人ともくず

鉄産業で…失礼、スクラップメタル産業でご活躍中のやり手でいらつしやる。」

「まあ！！何てこと！！長年オペラ座の支配人を勤めたあなたが辞めるなんて！！！！ま

さにオペラ座の恥！！理由をお聞かせ願いたいわっ！！！！」

イタリア訛りでまくしたてるカルロツタさんに苦笑しながらルフェーベルさんは一言小さくつ

ぶやいた。

「怪人にもあなたにも疲れたんですよ。」

ほんの小さな声だったけど、私とメグにははっきり聞こえた。
確かに最近変な事件が続いているのだ。バレリーナたちはそれを「
怪人」の仕業

とし、支配人としてルフェーベルさんは対策に追われていた。

しかし・・・彼がやめてしまっなんて。

場がずーんと重くなったとき、ふいに甘いテノールの声が聞こえてきた。

「僕は紹介して下さらないんでしょうかね、ルフェーベルさん」

いたずらっぽいその声に管理人はびっくりしたような顔をして慌てて招きよせた。

「これは失礼、子爵。こちら、ラウル・子爵。新しいオペラ座のパトロンだ。」

ラウル？

聞いたことがあるような...

思わず声の主を見ると、

思わず息を飲んだ。

彼は私の幼なじみ。まだ父が生きていたあの頃、よく一緒に遊んだ。

彼はいわゆるボンボンで、私も村の子供たちと一緒に頑張ってよく
じめた。

あのラウル。

「どうしたのクリスティーヌ？顔が真つ青よ？」

「あのパトロン…知り合いかも…。」

「うそお！！もしかして幼い恋人だったとか？」

「ないない。よくいじめてた。帽子を奪って、高い木とかの上に私
は登って、

『悔しかったらここまでおいで』とかやつたり。

泣き虫で、すぐビービー泣いたから私はよく怒られて、仲直りとか
いって古い物語を二人で
聞かされたりしてた。」

「クリスティーヌ…かなり悪かったんだね…」

「えへへ。あの頃のこと、根に持っていないと良いんだけど。」

「でもかなりハンサムね。玉の輿誰か狙うんじゃない？」

「げー。そういうのって何かやだ。」

私たちがあーだこーだとそんな他愛もない話で盛り上がっている中、

幹部たちは互いを紹介しあい、プリマドンナを説き伏せて、（おまけにラウル子爵はプリマドンナにサービスウインクなんかしちゃって！）まずは一段落ついた。

先ほどから早く練習を再開したくてうずうずしていた楽団長はこう切り出した。

「ではどうです。せっかくなのですから御三方にプリマドンナの Aria を聞いていただくのは。」

「おお、それは嬉しい。なあ、アンドレくん。」

「まったくだ、フィルマンくん。カルロッタさん、お願いできますか？」

「何言ってるのよ！！今回の新作にはまともな Aria がぜんぜんないじゃないの！！」

ダンスやコーラス中心で、何のために私はいるわけよっ！！！！」

ありやりや。また短気なプリマドンナ怒らせちゃった。

楽団長は一生懸命笑顔を作ってなだめにかかった。

「あるじゃないですか、3幕のあの、見事な Aria 『Think of me』が。」

「あれは素晴らしい Aria だ。プリマドンナにふさわしい。」

ルフェーベルさんもここはとばかりに楽団長に加勢する。

「そ、そうかしら。」

短気であると同時に単純なカルロッタさんは急ににこにこして咳払いをした。

「ではお願いしますよ…」

楽団長の指揮に合わせてピアノが前奏を奏で、歌が始まる・・・

4

「私を想って。優しく思い出して、”さよなら”を言った　あの時を

私を思い出して。時々でいいから　私のことを想って、お願い。そう約束して。

いつか　思い直す時が・・・キャー!!!!!!!!!!!!!!」

突然、背景が歌っているカルロッタさんの目の前に落ちてきた。

「おい!! 道具係はどうした!!!!」

「ご、ごめんなさい!!!! おらがちょっと離れた隙に・・・」

道具係のせいじゃない?!

「か、怪人の仕業よ。」

「そうだわ、きっと。」

バレリーナたちはみなおびえ、カルロッタさんは真っ青になって言った。

「もう我慢できないわ!!!! この間から私を狙ったとは思えない

事件がたくさん!!

もう・・・もう・・・今日のオペラには出ないわ!!!!!!!!!!」

そう言い放つと、彼女はドレスをばたばたと引きずりながら走って
いってしまった。

「どうしよう。もう今夜のオペラは中止か？」

「いやはや、参ったどうしよう。」

「プリマドンナの機嫌は直せないのかね？」

「無理でしょう。もう中止にするしか・・・」

「代理は立てないのですか？」

「いや、彼女の代理なんて・・・」

「います。」

突然、マダム・ジリーが口を開いた。

「マダム、それは誰でしょう。」

「クリスティーヌ・ダーエです。」

え？

その場にいた全員が固まった。

私??????

「コーラスガールに歌わせるのですか？」

「彼女は特別な先生についています。」

「その方のお名前は？」

「わけあって申せませんが・・・とにかく彼女の歌を聴けばご理解いただけるかと。」

みんなの視線が一斉に私に集まる。

嘘でしょ？

「さあ、歌って。」

ピアノが流れ、私は歌い始めた。

恋に悩む女性となって

・ 歌っているうちに私は自由になり、歌は羽をつけて羽ばたいた・・・

「見事だ。」

「彼女に決定だ。」

誰も知らなかった。

彼女の歌を地下で満足げに聴いている者がいようとは。

マダム・ジリー以外、誰も。

#4（後書き）

短くてすみません（汗

5

「私を想って。優しく思い出して、”さよなら”を言った　あの時を

私を思い出して。時々でいいから　私のことを想ってお願いそう約束して

いつか　思い直す時が・・・キャー!!!!!!!!!!!!!!」

突然、背景が歌っているカルロッタさんの目の前に落ちてきた。

「おい!! 道具係はどうした!!!!」

「ご、ごめんなさい!!!!おらがちょっと離れた隙に・・・」

道具係のせいじゃない?!

「か、怪人の仕業よ。」

「そうだわ、きっと。」

バレリーナたちはみなおびえ、カルロッタさんは真っ青になって言った。

「もう我慢できないわ!!!!この間から私を狙ったとは思えない

事件がたくさん!!

もう・・・もう・・・今日のオペラには出ないわ!!!!!!!!!!」

そう言い放つと、彼女はドレスをばたばたと引きずりながら走って
いってしまった。

「どうしよう。もう今夜のオペラは中止か？」

「いやはや、参ったどうしよう。」

「プリマドンナの機嫌は直せないのかね？」

「無理でしょう。もう中止にするしか・・・」

「代理は立てないのですか？」

「いや、彼女の代理なんて・・・」

「います。」

突然、マダム・ジリーが口を開いた。

「マダム、それは誰でしょう。」

「クリスティーヌ・ダーエです。」

え？

その場にいた全員が固まった。

私??????

「コーラスガールに歌わせるのですか？」

「彼女は特別な先生についています。」

「その方のお名前は？」

「わけあって申せませんが・・・とにかく彼女の歌を聴けばご理解いただけるかと。」

みんなの視線が一斉に私に集まる。

嘘でしょ？私なんかができるわけないのに・・・

躊躇する私をマダム・ジリーは優しく前に押し出して言った。

「さあ、歌って。あの方もきつと喜んでくださるわ。」

先生。

ピアノが流れ、私は歌い始めた。

先生聞いてください。

私の歌を。

あなたの愛弟子の歌を。

・ 歌っているうちに私は自由になり、歌は羽をつけて羽ばたいた・・・

「見事だ。」

「彼女に決定だ。」

誰も知らなかった。

彼女の歌を地下で満足げに聴いている者がいようとは。

マダム・ジリー以外、誰も。

6

「まさか・・・あれはクリスティーヌ?!」

二回の特等席でオペラを鑑賞していたオペラ座のパトロン…ラウルは、第三幕のアリアを歌っている女性に気づいた。

「何てことだ。僕の初恋の女性がオペラ座で歌っているなんて!! プリマドンナの代理として!!これは運命だ!!そうに違いない!! オペラが終わり次第クリスティーヌを食事に誘おう!!!!!!」

クリスティーヌにそんな気がこれっぽちもないことを知らない子爵は、夢見心地で彼女のアリアを聴いていた。

「私たちは誓っていない。愛は永遠で海のように変わらないなんてでも私に約束して、時々でいいの私を思い出して……」

「この私を!!!!!!」

クリスティーヌの歌声は清らかに美しく、オペラ座全体に響き渡った。

そしてそれに答えるかのように、聴衆の喝采が彼女に送られた。

[illegible]

何て素晴らしいの!!!!!!

歌い終わった私は何百もの人に拍手を送られて、これ以上ない幸せに満ち溢れていた。

たくさんの人から愛されるのがこんなに幸せなことだなんて、思ってもみなかった。

お父さんのところに行かなくちゃ。

オペラが終わるとそつと劇場を抜け出して、父の遺影が飾られている部屋に行った。

蠟燭を燈し、祈る。

不意に蠟燭がゆらりと動き、私に彼が来たことを知らせた。

「素晴らしかった、クリスティーヌ。」

「先生……」

全部、全部先生のおかげ。

そう思つて一人涙ぐんでいると、廊下がにわかに騒がしくなった。

「クリスティーヌ??」

慌てて涙を拭くと、ドアからぴよこつと彼女が顔を出した。

「全く、どこの世界に隠れちゃったのかと思ったよ」

お疲れ、クリスティーヌ

今日のステージすごい良かったよ!!! いつの間について感じだつた!!!

ね、『特別な先生』って誰のこと???」

すごいマシンガントーク。

豊かな金髪をきらきらさせて、大きな緑の瞳をいっぱいに開いて、いろんなことを残らず知ろうとして。

この天才ダンサーは引っ込みがちな私にいつも新しいものを見せてくれた。

だから。

この子になら・・・いいかもしれない。お母さんだって知ってるんだし。

「私の先生はね、お父さんが送ってくれた天使なの。」

「は？またクリステイー又ったらそんな夢みたいなこと言っちゃって。」

「父は死ぬ間際に私に約束してくれたのよ。天国に行ったら、音楽の天使を送ってあげようって。その日、私は本当に音楽の天使に出会ったのよ。」

彼はいつも私にレッスンをしてくれて・・・今この部屋にもいるわ。私にはわかるの。」

「眼を覚ましてよ。そんな御伽噺みたいな話、あるわけないよ！！ねえ、手が冷たいよ。」

「彼はいるのよ。」

「顔だって蒼いし。」

「だって私はそうじゃなきゃ一人・・・」

「私がいるでしょ？何をおびえているの！！ね、部屋に戻ろう。みんな待ってるよ。」

メグは私をぎゅっと抱きしめてくれた。

・・・
+・・・

部屋に戻ると、花束や、プレゼントで溢れかえっていた。

こんなにどうしようっていうくらい。

コンコン

・・・誰じゃい。

「どなたですか？」

「ちょっと入りますよ。」

嫌な予感。

すごおーーくいやな予感。

この滑らかで綺麗なぼくちんかつこいいぜ系な声。

「ラウル……」

「久しぶりだね、クリスティーヌ！――ずうーっと君に会いたかったんだ――！」

満面の笑顔には裏はなさそうだ。とりあえずいじめの記憶はないってことで。

「お、オペラ座のパトロンになったんだってね。おめでとう。」

「ありがとう。ね、今日一緒にディナーしないかい？馬車なら待たせてあるよ――！」

「は？」

「じゃあ、5分で準備してね。迎えにくるから――！」

「ちょ、ちょっと待て――！！――！」

あゝひとり浮かれて行っちゃった。

やだな。ラウルとディナーとか。
最悪。

でもパトロンの逆らったらずいのかな。

あゝあいつのせいで気分ぶち壊し。

「私の宝物に手を出す愚か者め。そうやって自分の栄華に浸っていればいい。若輩者がいい気になりおって。私のオペラ座を奪えりとも思ったのか。」

突然聞こえてきた、心を震わすようなテノール。

こんなに豊かな声量と魅力的な声の持ち主はこの世で一人しかいないだろう。

「せ、先生!!」

「可愛い私のクリスティーヌ、今日のオペラは見事だったぞ。」

「全て先生のおかげです！！何てお礼を申し上げたら良いか……」

「私はお前の能力を引き延ばしただけだ。それより、幹部が交代して早々にお前は大成功を収めたのだ。プリマドンナになれるかもしれないぞ。あのへたくそなイタリア女の代わりにな。」

「そんな…私にそんな大層なこと…」

「お前と私なら出来るさ。」

さあ、今夜はちよつとした祝いをしようかと思っただが…ラウル子爵様とのデートの方が良いかな？」

「ま、まさか！！先生にお祝いしていただけるなんて、最高です！！相手が子爵だろうが公爵だろうが先生のほうがずっといいです！！！！」

だって、先生に会ってみたい。

私は先生の姿を一度も見たことがないのだ。14年もレッスンを受けていながら。

「本当に面白い子だ。良いだろう。鏡の中の自分自身を見てみなさい。そこに私は居る……」

目の前の大きな姿見。そこには自分を見つめる私の姿・・・・・・・・

そして、顔を半分仮面で覆った、一人の男の姿が映っていた。

驚いて部屋の中を見回しても、そこには誰も居ない。

黒い燕尾服に身を包み、漆黒の髪をなでつけた彼こそ、私の音楽の天使、Angel of music・・・・

「その鏡は扉になっている。さあ、おいで。」

二人だけの音楽の世界に・・・・・・・・」

その深く甘い声に酔ったように、私は隠し扉の鏡の向こうの世界に足を踏み入れた。

.....
+.....

ん

クリスティーヌとデート

クリスティーヌとデート

着替えを済ませた僕はクリスティーヌの部屋に小踊りしながら足を運んだ。

どんな服かな。

セクシーなタイトかな。

それとも清純なプリンセスかな。

色は何色かな。

ピンクかな。

でも彼女は赤も似合うな。

いやいや、寒色系も素敵だろうな。

小さい頃こそいじめられっ子だったが、数年前頃から僕に近づく女性が多くなった。

美形で、お金があって、けっこう優しい。

僕の定評はそんなところだ。

この数年間、僕の甘い誘いを断れる女性はいなかった。
魅力的なウインクの仕方からキスのタイミングまで熟知している僕だから。

クリスティーヌもきつと今夜から僕にメロメロさつ。

きや

そんなことを考えて緩んだ口元を締めてから、ドアノブをこつこつと叩いた。

「クリスティーヌ、準備は出来たかい？」

「ええ。」

微笑みながら現れる彼女の腕をとり、馬車の所へ……

そんな妄想は打ち砕かれた。

「先生……ぜひ……ええ、もちろん……」

綺麗なクリスティーヌの声が語りかけてる相手は僕じゃない。

「先生」って誰だ？！

しかしどんなに耳を澄ませても、不思議なことに相手の声は聞こえない。

「クリスティーヌ！！誰と一緒になんだ！！」

ドアノブをガチャガチャと回すが、鍵がかかっているようで開かない。

「くそっ！！クリスティヌ！！答えてくれ！！クリスティヌ！！！！」

ラウルの叫びは彼女には届かなかった。

全てを見守るのはただ一人……………

マダム・ジリーの
み。

#7

何本ものろうそくに照らされた長い廊下。
私は彼に導かれ、夢見心地で歩いていた。

どこに行くのかも、何が起るのかもわからないけど、先生と一緒にいれば大丈夫。
根拠のない、確信のようなものがあつた。

廊下は階段になり、それを下ると馬が一頭繋いであつた。

「乗りなさい。」

私だけ乗ることにためらうと、先生は私をそっと抱き上げて馬に乗せた。

彼が轡を引いて殺風景な道を行く。

誰もいない。

ところどころに燭台があり、道を微かに照らしている。

幻想的といえは聞こえはいいけれど、正直怖い。

「ここは…どこなんですか……」

「オペラ座の地下だ。」

二人の声と、足音だけが響き、静寂を更に濃くする。

その先には湖のようなところがあり、馬から下りて船に乗って進んだ。

建物の中なのに何て不思議なところなんだろう。

この人は…何なのだろう……

「怖がるな。私はお前の音楽の天使なのだから。」

私の心を見透かしたように微笑む彼の声に私の吐息が重なって。

二人のデュエットはいくつもの響きを生み出し、私の心には彼が住み着いて、まるで一つとなったよう。

ろっそくがいくつも水面に浮かび、霧のなか、舟は進み、白い壁に突き当たった。

彼がにわかに壁に手を触れて、何か呟く。

と。

「魔法?!」

壁の真ん中が重たげな音を立てて開き、壁は門へと変わった。

「驚いただろう。」

この門には水力を使っているんだ。
魔法なんて得体の知れないものじゃない。理論的にきちんと説明の
できる仕組みを使っているんだよ。私はこういった発明をするのが
ちよつとした趣味なんだ。」

発明が趣味……

どんだけこの人はぶつとんでるんだ。

門を抜けると、そこにはもう水はなく、代わりに煌めくたくさんの
宝飾品や、実験に使うような小難しい道具、分厚い本や楽譜が雑然
と、しかしある秩序をもって並んでいた。

「私の音楽の世界へようこそ。」

彼に支えてもらって舟が出る。

ここは美しい彼の世界・・・・・・・・

「私が今夜お前をここに連れてきたのは、一つの原因がある。

無論、オペラ座デビューの祝いのためでもあるが、もう一つ大きな訳があるのだ・・・・・・・・

ステージで歌うお前の声を聴いたとき、私は本当に感動した。

そして、思った。

お前となら、私の音楽の世界を完成できると。

今この世界ではびこっている『音楽』とは、上流階級の貴族にちやほやされるだけのお飾りに過ぎない。
オペラだって一種の社交のようものだ。

このオペラ座も例外ではない。

表面だけ飾り立てて、豪華な演出をしていても、今のオペラ座の音楽は死んでいる。

クリスティーヌ。

お前の力が必要なのだ。

お前と私となら人の心を動かすような音楽を創れる。

貧しい者、疲れた者もふと涙を流してしまうような本物の音楽を二人で創らないか。

本当に美しい音楽を創ろうではないか。

私の愛弟子よ。」

息が止まりそうだった。

あまりにも大きな話をされて。

おまけに彼は私に見せたいものがあるといった。

それは

ウェディングドレスを着た、私そっくりの蠟人形だった。

それを見た瞬間、私の意識は途切れた。

†

たな。

た

だ。

寝かせ、囁いた。

手伝ってくれ、クリスティーヌ。

私の音楽の世界を完成させるのを。

#7（後書き）

なんか先生が変態チックですね（笑

試験終わりました！！！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4520f/>

The Romans At The Opera

2010年11月24日06時39分発行